

ジョージ・オーウェルの作品と彼を描く伝記と

—*Down and Out in Paris and London*を中心として—

中窪 靖

要 約

ジョージ・オーウェルは「伝記」には否定的であった。その遺言の中で、彼は「伝記」の執筆を禁じたという。一方で彼は、個人の人生を描く伝記の記述には対象となる作家の家系の説明が不可欠だと考える。この小論は、こうした相矛盾するオーウェルに注目する。

植民地ビルマで帝国主義的な支配を目の当たりしたことで、彼の作家活動は始まる。警察官として5年の勤務をへたのち*Down and Out in Paris and London* (1933) というルポルタージュ作品を発表し、彼はエリック・ブレアからジョージ・オーウェルになる。

現在までに、無視できない存在の彼についてはすでに数多くの「伝記」が出版されている。没後30年をへて、決定版と呼ばれる「伝記」が出版される。そして2003年に、ポーカールとテイラーという二人によってそれぞれの「伝記」が出版される。この小論では、主として論述の対象をこの二つの「伝記」とする。生誕100周年という年にKGBとの関係を示す新たな資料を読み込んだり、一方で作家という視点からかなりの思い入れを込めていたり、これらは新たな視点から描かれているからである。私は「伝記」を読み込むことが作品の理解に如何に貢献するのかという論点に立っている。そして対象とする作品は、パリとロンドンの下層労働者の生活を観察した*Down and Out in Paris and London*に限ることとする。

「伝記」を読むとは、作品理解の先取りをすることでもある。また、伝記作家は作品の下敷きになった忘備録の存在を明らかにしてくれる。さらには、作家の心の裏にある思いをも読者に知らせてくれる。こうした諸点を作家の作品に照らし合わせて見ると、読者は人生の様々な場面での出来事が、作家を作り上げるための大きな要因になっていることを知るのである。

キーワード：植民地ビルマ、伝記、生誕100周年、作品理解

序論 オーウェルにとっての伝記

20世紀英国の作家ジョージ・オーウェル (1903-1950) は彼の人生を描かれることをよしとしなかったという。この彼の思いは、彼の死後妻のソニアに受け継がれた。彼女は、夫のことを描く伝記作家について批判の目を向け続けることとなる。

2003年のオーウェル生誕100周年にひとつの伝記を発表したゴードン・ポーカールは次のように述べる。

Days before dying, on 21 January 1950, George Orwell inserted a clause in his will asking for no biography. Biographers of George Orwell have therefore often been accused of disregarding a dying man's wishes. However, viewing this final request in the context of

Orwell's life raises the question of its authenticity. Was it made freely or under the pressure of circumstances?¹

彼の伝記を書こうとする者はオーウェルの意に反したことをする者、というレッテルを貼られている。ポーカーはそれに対して、次の反論を唱える。オーウェルの人生をコンテキストに据えてオーウェルの遺言、すなわち伝記を書いたはならぬというオーウェルの希望をよくよく考えてみると、そこには本当のオーウェルの意思はいかなることであるのかという疑問が生まれる。この遺言は彼の素直な気持ちの発露であるのか、周りの人々に強要されたものであるのか、いずれが真実なのか。²

さらにポーカーは、彼自身の手になる伝記の冒頭部分では、オーウェル自身の次の一節を引いている。

'It is probably true that you can't give a really revealing history of a man's life without saying something about his parents and probably his grandparents.'³

これは、オーウェルが1945年にBBCのラジオ放送で語った言葉である。この一節を根拠にするかのように、ポーカーは伝記の冒頭部分をオーウェル、本名エリック・ブレアのルーツの描写に当てる。

チャールズ・ブレアの子供は、全部で9人であった。しかしながら、4人までは成長することなくこの世を去った。残った5人のうちの一番下の子供が、エリック（ジョージ・オーウェル）の祖父となる人である。しかしながら、貴族的なつながりを持つブレア家も、エリックの父が生まれる頃には、次第にそのつながりが希薄になりつつあった。なぜエリックの父がインドで働くことを決意したのかは不明である。一説に、不幸な恋愛を経験したという解釈もある。父の選んだ仕事は、どんな仕事なのかのかわかりにくく英雄的とは程遠いものであった。1875年、リチャード・ブレアは厳しい選抜試験を課されることのない仕事すなわち、阿片省（Opium

Department）の役人の仕事を始める。

ポーカーは、上述したように、ジョージ・オーウェルすなわちエリック・ブレアの両親の家系図を説明する。例えば、エリックの父方はもともとは、大規模な砂糖農園で財をなした家系である。そして、伯爵の娘と結婚し次第に裕福な階級に属するようになったが、父リチャード・ブレアが一人前の年頃になる頃には、没落の兆しが見え始めていた。リチャードはインドの阿片省の役人となるが、その詳しいいきさつは明らかではない。一方で、ポーカーはリチャードが順調に出世していく様子を描写し、まざらこの職業の選択が彼にとって間違った選択ではなかったことを暗示しているようにもみえる。一方、母方は、フランス出身の家柄で祖父フランスは材木を商い財をなした。ビルマに移住後、彼は船会社を経営した。母アイダ・メイベル・リムジンは、彼が不慮の事故で妻子を亡くした後、再起を賭けた二度目の結婚で生まれた娘である。エリックの父と母とは17歳の年齢差のある夫婦であった。年齢も不釣り合いであったが、性格も異なっていた。リチャードは面白みのないどちらかと言えば嫌われ者タイプであり、アイダははつらつとした知性的な女性であった。⁴

また、ポーカーは彼の論文（'Orwell and the biographies'）の中で、次のように述べる。ジョージ・オーウェルは、彼自身の伝記が書かれることについて、次のような要求を抱いていたと言える。1）伝記作家は、敬虔さと機知とを兼ね備えるべきである。2）対象とする人物の行動を病的に事細かに描写するのではなく、分析的かつ解釈的な手法を用いるべきである。3）人物分析は、その対象の作品と関連付けるべきである。⁵

これをまとめると、「伝記とは、人物の性格を無視せずその人物の内的な生活を明るみに出すようすべきものである」ということになるであろう。ポーカーは彼自身が述べるように、オーウェルの人物像を描く際に、彼の性格を無視せずに内的な生活を明るみに出すことを試みる。

この小論ではその扱った範囲を、オーウェルの人生最大の分岐点であるジョージ・オーウェル

の誕生直前までに限定する。そして私の目標は、2003年すなわちオーウェル生誕100周年の記念すべき年に出版された二つの伝記に注目し、それらの伝記の読み込みがオーウェルの人物像および作品の理解に如何に寄与するかを明らかにすることである。もちろん、上記の二つの伝記が出版される以前にすでにいくつかの伝記が世に問われている。その中には、クリストファー・ホリスが1956年に出版した *A Study of George Orwell* に始まり、ピーター・スタンスキーとウィリアム・エイブラハムの二人の手になる1972年と1979年の *The Unknown Orwell* と *Orwell: The Transformation* の二つを経て、1980年に出版されるバーナード・クリックの *GEORGE ORWELL A LIFE* へと至るという一連の流れがあることは周知の事実である。特に、クリックの伝記はオーウェルの妻ソニア・プロムネルの要請を受けて正当な伝記として執筆されたものである。しかしながら、これは世に出る直前に彼女の意図するものとは異なっていることが明らかとなり、ソニアから出版の中止を求められるといういわくつきの伝記となった。さらにそれから10年をへてマイケル・シェルデンが1991年に *ORWELL The Authorised Biography* を発表する。よって、オーウェル生誕100周年の年に出版された二つの伝記は当然、これら先に出版された伝記を踏まえている。⁶

そこで、私は2003年に出版されたボーカーとテイラーの二つの伝記を中心に据えながら、上述したものを含めその他の伝記にも言及しつつ、作品と伝記との関係について論じていきたい。

第一章 生誕100周年出版の二つの伝記

すでにジャーナリストとしてまた伝記作家としてジョージ・オーウェルに関心を持っていたゴードン・ボーカーは彼の伝記 *GEORGE ORWELL* の中で、新しい視点からオーウェルの人生を検証したと述べている。彼のもつ性と自己欺瞞に対する複雑な性癖に注目し、また、最近眼にすることが可能になったKGBと彼との確執を示す資料を読み込みオーウェルの人物像を明らかにした。⁷

一方、D. J. テイラーは、作家の視点で、オーウェルの内面に光を当ててその伝記 *ORWELL THE LIFE* を構成している。また、この伝記は2003年に The Whitbread Biography Award を獲得している。この意味でも、無視できない重要な伝記と位置付けることができるであろう。

1934年にエリック・ブレアは、彼のビルマでの5年間の植民地警察官の体験をもとにした小説作品 *Burmese Days* (1934) を発表した。その1年前に、彼は *Down and Out in Paris and London* (1933) (以後、*Down and Out* と記す) を発表している。この小論では、この作品の成立の時期に焦点を当てる。

エリックにとって、ビルマでの5年間は幸せな年月とは言えなかったであろう。彼は、英国が植民地で行っている支配の様子を自身の目で観察し、それに対する思いを脳裏に留めていくことになる。ビルマでの5年間の警察官としての任期の間にも、彼は左翼的な雑誌を購読していたが、彼の思いのたけを爆発させるのは、病を理由に一時イギリスに帰国して以降である。英国の不条理な形でのビルマに対する支配は、彼の政治的な意識を呼び覚ます。植民地の中には支配する側と支配される側という二つの相反するグループが存在することを、若きエリック、すなわちジョージ・オーウェルは見取ったのであろう。*Burmese Days* では、ビルマの中で絶対の権力を持つ総督の姿を醜く描く半面、ビルマの英国人経営の会社に入りそこで働き始める一人の英国人フォーリーのジレンマを巧みに描く。

1927年、すでに警察官としての職務の5年目を終えようとする時期に、エリックは病に倒れ療養するべくイギリスに一時帰国する。5年という年月の経過は、すでにエリックの脳裏に、自身の目で見えた不条理な状況を世に知らせるといふ義務意識が芽生えていたことはクリックやシェルデンなど主要な「伝記」作品が指摘しているとおりである。

The probability is that in mid-1927, ill, longing for England and doubting the value of what he was doing, Orwell had no clear

idea of his future direction. It took the months that followed to develop these feelings to the point where they could be publicly expressed. Two years later, in an article for a French newspaper, he would write that 'if we are correct, it is true that the British Empire is simply a device for giving trade monopolies to the English – or rather to gangs of Jews and Scotchman'.⁸

テイラーは上述のように述べ、1927年の半ばにエリックの脳裏に沸き起こる思いを我々に伝える。エリックには未だ明確な将来へのビジョンがあるわけではなかったが、病を発症したことでイギリスの地への思いを募らせていた。また、ビルマでの警察官としての職務にも価値を見いだせなくなってきていた。そして、2年後の1929年に発表した文章では、大英帝国が植民地で行う行為とは、貿易の独占権をイギリス人に与えているにすぎないのだと断罪する。こうしたテイラーの指摘から、我々はエリックの中で自国への憤りの思いが消し去りがたくなっていることに気付かされる。

多くの同窓生が大学へ進む中、植民地に勤務する警察官になるという選択肢を選んだエリックが、5年たたないうちに彼が身を置いている国家への憤りを強くしたことは、もちろん資質的に搾取する側への非難の気持ちが強い人物であったことが大きな原因であろうが、それに加えて、彼が身を置いた環境が彼に与えた影響がいかに大きかったかが推測される。

伝記は、まずオーウェルの作品を読む際の寄り添いとするところを教えてくれる。ビルマに赴いて5年が経過する頃に、彼は病の静養で一時イングランドに帰国した。この帰国を機に、エリックは警察官の職を辞する。

テイラーは述懐する。初めて実家の家の書棚から手に取った「大人向け」の小説が『牧師の娘 (A Clergyman's Daughter)』(1935)であった。それは彼の母親が購入したものであった。それを彼は、母の何かに突き動かされるような思いがそうさせたと解釈する。また彼自身、中等教育一般証明書試験 (GCSE) を受験する際

に、「あなたが一番伝記を書きたい作家はだれか」というタイトルの課題で、オーウェルを題材にしたことを仄めかす。こうしたことが、彼がジョージ・オーウェルという人物を決して忘れられない存在とすることになった。

また、テイラーは文壇でのオーウェルの位置づけに疑問を持ち続けてきた。彼はその例として、1980年にバーナード・クリックの世に問うた伝記への文壇からの評価に疑問を込めたコメントをする。多くの批評は昔ながらのお追従からなされるのではなく、作家ならば99%は問題としない事柄を問題とするという確信のもとでなされていた。そのことをテイラーは、伝記の中に「どうしてひとは、個人的な問題に首を突っ込みたがるのであろうか」という問いのかたちで書き入れている。

そして、テイラーは彼が伝記を書くに至った最後の要因を、オーウェルを描く伝記が紆余曲折の歴史の中で執筆されてきたことに思いをはせる。そこには、オーウェル自身が生前に伝記を書かれること拒否していたという事実があった。オーウェルの未亡人となったソニア・プロムネルは、当初オーウェルの友人のひとりマルカム・マガリッジを公式な伝記作家に任命したが、多忙であるにもかかわらず壮大な伝記を構想したためその伝記は日の目を見ることはなかった。1972年には、スタンスキーとエイブラハムとが共同でオーウェルの伝記を世に問うた。しかしその作品に対して、オーウェルのもう一人の友人であるシリル・コナリーは、否定的なコメントを発表したので、ソニアは新たに公式な伝記作家を任命する必要に迫られた。そこで白羽の矢が立ったのが、バーナード・クリックであった。つまり、1980年のクリックの伝記の出版により、オーウェルの伝記の歴史が正式に始まったというのが定説である。そして、1991年にはマイケル・シエルデンが、2000年にはジェフリー・メイヤーがそれぞれの伝記を発表する。⁹

テイラーは、上述したことを中心にこれまでのオーウェルを描く伝記の歴史を概観するが、直接に彼の執筆した伝記の存在の意義を明確に表明しているとは言えない。しかしながら、す

でに私が言及したように、彼とジョージ・オーウェルという作家との因縁は浅からぬものがあることは確かである。テイラーは伝記の中で、彼なりのオーウェル像を構築しようとしているのではないだろうか。

テイラーと同様に、ゴードン・ボーカーも彼の論文の中で、正当なオーウェルの伝記の成立について説明している。特に彼の場合は、さらに詳細な説明を加えている。彼は、ソニアが非難したことを伝える。スタンスキーとエイブラハムとの共同の作品については、オーウェルの残したものを断りもなく引用したので、彼女はそれを誤りと誤解に満ちているとした。また、彼女はマガリッジに関しては愚か者と断罪し、伝記作家を辞退することを求めた。¹⁰

1933年1月8日（木）に、エリック・ブレアはジョージ・オーウェルになる。彼がペンネームを使うのには二つの理由があった。ひとつは、彼の作品を出版する出版社が裁判沙汰になることを避けたいということである。そしてもうひとつは、両親と姉に迷惑をかけたくないという気持ちである。

... Burma, it might be said, established one of the central oppositions in Orwell's life and writings: the conflict between his commitment to fair play and liberal principles and a latent authoritarianism constantly breaking out in complaints about grinning yellow-faces. Occasionally this took on a symbolic focus. On the one hand Orwell subscribed to the free-thinking, left-leaning *Adelphi*, a magazine in which some of his earliest journalism appeared, while he was in Burma. On the other, he was quite capable of nailing copies to a tree and taking pot-shots at them when their brand of idealistic left-wing politics became too irksome to be borne. As a Burma police officer whose working life was spent dealing with the practical consequences of Imperialism, Orwell was constantly annoyed by the sheer gaucherie of most anti-Imperial polemic.¹¹

今引用したように、テイラーは伝記の中で、オーウェルという人物の相矛盾する性格を暗にほめかしながら、ビルマでの警察官としての体験がオーウェルに帝国主義的な政策に批判の目を向けさせることになったと指摘している。オーウェルは、左翼主義者たちの展開する反帝国主義的議論の論証の粗雑さにうんざりさせられた。これは、日々警察官として帝国主義的なふるまいを実践している彼にとっては、歯がゆいことであった。オーウェルはビルマでの5年間で、帝国主義的支配を受ける人々の虐げられた様を目にしそれを脳裏に焼き付けた。その結果、彼がイギリス自身が抱える貧困に向かうのは必然的な結果であろう。

1928年、エリックはパリにむけて出発する。彼は、まずフランスでの労働者の様子を自身の目で見ることを強く願っていた。*Down and Out* は、仏語で *plonguer* と呼ばれる人々についての観察の記録の部分が前半部分を占めている。エリックと想像される人物に案内されるようにして、読者はパリのホテルの下働きをして生活をする人々の日常の一端を垣間見る。「埋没する人・潜る人」という意味を表わすこの仏語に込められた意味は、普通に生活のできない人々、すなわちその日その日を食いつなぐ貧しい労働者を表わしている。エリックは、自らがそうした労働者の生活の中に入り込むというルポルタージュの手法をとっている。

一方、ゴードン・ボーカーは彼の伝記の中に次のような一節をおいている。

He was twenty-four when he set off for France in the spring of 1928. He was still unpublished, but took with his draft manuscript and a diary of his tramping.¹²

エリックがパリに赴いたのは、24歳のときであった。しかしながら、結局、彼は気管支炎にかかり吐血し病院に入院せざるを得なくなり、パリでの生活は終わりを余儀なくされる。

ところで、*Down and Out* の主人公である「私」は、ホテルの労働者としてその日その日の生活をしている人物と知り合いになる。その

人物はボリスという名のロシア人で、別なロシア人から新たなホテルの開業の事前情報を聞き、開店すればすぐにでもその人物のもとで仕事ができると想像していた。ホテルのレストランのボーイとして働いていた彼は、ロシア人難民として数奇な運命を生きてきた。彼の夢はホテルの主となることであった。また、セヌ川の右岸に小さいがしゃれたレストランを経営することを夢見ていた。一方「私」は、着ているものからめほしいものを質入れして金の工面をしなくてはならないほどに貧しい生活を送るようになっていた。

We again failed to find work the next day, and it was there weeks before the luck changed. My two hundred francs saved me from trouble about the rent, but everything else went as badly as possible. Day after day Boris and I went up and down Paris, drifting at two miles an hour through the crowds, bored and hungry, and finding nothing.¹³

The first day, too inert to look for work, I borrowed a rod and went fishing in the Seine, baiting with bluebottles. I hoped to catch enough for a meal, but of course I did not. . . . On the second day I thought of pawning my overcoat, but it seemed too far to walk to the pawnshop, and I spent the day in bed, reading the Memoirs of Sherlock Holmes. It was all that I felt equal to, without food. Hunger reduces one to an utterly spineless, brainless condition, more like the after-effects of influenza than anything else. It is as though one had been turned into a jellyfish, or as though all one's blood had been pumped out and lukewarm water substituted.¹⁴

「私」は空腹のために、病み上がりのような脱力感を感じていた。この作品の中では、主人公の貧しい生活の描写はさらに続く。一方で、ホテルで働く最下層の労働者の姿を克明に読者に伝えようとしている。

. . . Except for about an hour, I was at work from seven in the morning till a quarter-past nine at night; first at washing crockery, then at scrubbing the tables and floors of the employees' dining-room, then at polishing glasses and knives, then at fetching meals, then at washing crockery again, then at fetching more meals and washing more crockery. . . .¹⁵

. . . After this the *chef du personnel* appeared and spoke to me. Like the waiter, he had grown more genial on seeing that I was willing to work.

'We will give a permanent job if you like,' he said. 'The head waiter says he would enjoy calling an Englishman names. Will you sign on for a month?'

Here was a job at last, and I was ready to jump at it. Then I remembered the Russian restaurant, due to open in a fortnight. . . .¹⁶

この後、「私」はホテルの仕事の延長を断るが、そのことをボリスに告げると彼はすごい剣幕で「私」を非難した。ボリスの主張は、「潜る人」と呼ばれる最下層の労働者は雇い主に気を遣う必要はないというものである。やめる必要が生じて初めて職を辞すことを報告することで十分であるというのがその主張である。

As it turned out, I did not break my contract, for it was six weeks before the Auberge de Jehan Cottard even showed signs of opening. In the meantime I worked at the Hotel X., four days a week in the *cafeteria*, one day helping the waiter on the fourth floor, and one day replacing the woman who washed up for the dining-room. . . . The hours were from seven in the morning till two in the afternoon, and from five in the evening till nine – eleven hours; but it was a fourteen-hour day when I washed up for the dining-room. By the ordinary standards of a Paris *plonguer*, these

are exceptionally short hours. The only hardship of the life was the fearful heat and stuffiness of those labyrinthine cellars. Apart from this the hotel, which was large and well organized, was considered a comfortable one.¹⁷

たとえ労働時間は短くとも、「私」は暑さに閉口する。しかし、ボリスの言う新しく開店するレストラン付ホテルで共に働くことを夢見、現在の職場での契約を長期に変えるつもりはない。「私」は週に4日はセルフサービスの食堂で雑用をし、1日は給仕係の補助の仕事をし、後の1日は食堂の掃除婦の代わりを務める。

第二章 二つの伝記に描かれる *Down and Out in Paris and London*

次に、*Down and Out* に限定して伝記作者の言及に目を向けたい。ボーカーは次の一節を置いている。

His time in Paris was an early initiation into the politics of the age. From Eugene Adam, still bearing the scars of his battle with Moscow, he had heard an unequivocal anti-Stalinism, the bitter message of a romantic whose dream of a universal language under socialism had been shattered. He saw the growing divisions and mounting antagonism between extreme right and left in France, and the way in which newspapers were often intent on deluding the reader, selling an underlying message while purporting to inform. He returned to England with a more cynical view of politics and an even more anti-authoritarian outlook, even if that generally anarchic cast of mind was still not fully focused. And, just as interestingly, he had acquired a European perspective. If Europe was the cockpit in which ideologies were increasingly likely to clash, it was also home to the broader tradition on which his own

inspiration fed. He saw England as too culturally isolated for its own good, though he knew that isolation could not be long maintained. England drew him back more out of necessity than choice. And although he loved England, from time to time he expected a strong desire also to return to France.¹⁸

上記の引用は以下のように言うことができるだろう。

オーウェルはパリ滞在中に、モスクワ戦線に参戦したユーゲン・アダムより、明確に反スターリン主義の宣言を聞いた。それは社会主義の旗の下万人に共通の言語が用いられる社会を夢見ていた彼の夢が打ち砕かれる瞬間であった。またフランスでは、極右と極左の間で繰り広げられる分断といがみ合いを目にした。また、新聞は意図的に読者を惑わすような報道に徹していた。

こうして彼は、以前には彼になかったような皮肉な視点で英国に政治的状况を見つめるようになる。いかにそれが無政府的な状況への見方が十分でないとしても、正統的な見方にそむくような観点からものを見るようになる。

また彼はヨーロッパを飛行機の操縦席に例えて次のように言う。飛行機の操縦士がそれぞれのスタイルで飛行するように、オーウェルの生きる同時代のヨーロッパは様々なイデオロギーが衝突する場となっている。パリで不当に虐げられた状況にある最下層の労働者たちの中に我が身を置いたルポルタージュの体験は、オーウェルに政治的なものの見方を身につけさせることになる。それをボーカーは、オーウェルの文章に垣間見える素晴らしい思い付きの源泉になっていると語る。ヨーロッパでイデオロギーの洗練を受けたオーウェルは、母国イギリスを客観的に見る力を身につけたと言えるかもしれない。

一方、後半のロンドンを描く箇所については、次のようなことがいえる。テイラーは描いている。

On Sunday morning they passed through Sevenoaks into the heart of Kent. Government inspectors were at large in the county enforcing the recent legislation introduced by the Labour government to the effect that all hop-pickers should have accommodation.

However, there were ways of circumventing the new laws. An old Irishwoman they fell in with near Maidstone advised them that she had got a job on one of the farms merely by claiming that she had lodgings nearby: in fact she was sleeping clandestinely in a tool-shed. Once again Orwell's conscience had a bad moment when Ginger and the Irishwoman used him as a front while they palmed cigarettes and apples from under the nose of a local shopkeeper. The three of them spent the night in a half-built house. On the next day, 1 September, with money running low, they failed to get taken on at Chalmers' Farm.

When they were 'tapping' a gentleman picnicker, the man became so friendly that Orwell forgot to put on his faux-cockney accent and was courteously presented with a shilling. A life from a lorry driver took them to the spike at West Malling where, next morning, they secured jobs at Blest's farm and were immediately sent out into the fields. . . .¹⁹

テイラーは、日記の中に現れるホップ積み労働者に身をやつすオーウェルの観察眼に注目する。当時の労働党政府が制定した法律により、イギリスの労働者は住まいとなるいわゆる「どや」を与えられる。しかしながら、その法律が守られていないのが現実である。彼はユダヤ人のジンジャーとアイルランド人の女と行動を共にするが、そのアイルランド人のあてがわれている「どや」は、道具置き小屋に過ぎない。そんな中彼らは、店の中でオーウェルに店員とのやり取りをさせその隙にたばことリングをただでせしめるという抜け目のない行動をとる。それを、オーウェルは不愉快に思いながらも日記に書き留めている。しかし、彼らはいつもう

まく仕事にありつけるとは限らない。次の日仕事にありつけなくなると、人のよさそうな日雇い仲間から金を巻き上げ生活の資とする。オーウェル自身はそのかわいそうな男を前にして、ロンドンの下町訛りも忘れて思わず素の彼になる。

さらに、*Down and Out*の中には次の描写がある。

Bozo had a strange way of talking, Cokneyfied and yet very lucid and expressive. It was as though he had read good books but had never troubled to correct his grammar. For a while Paddy and I stayed on the Embankment, talking, and Bozo gave us an account of the screeving trade. I repeat what he said more or less in his own words:

'I'm what they call a serious screever. I don't draw in blackboard chalks like these others, I use proper colours the same as what painters use; bloody expensive they are, especially the reds. I use five bobs' worth of colours in a long day, and never less than two bobs' worth. Cartoon is my line – you know, politics and cricket and that. Look here' – he showed me his note-book – 'here's likenesses of all the political blocks, what I've copied from the papers. I have a different cartoon every day. For instance, when the Budget was on I had one of Winston trying to push an elephant marked "Debt", and underneath I wrote, "Will he budge it?" See? You can have cartoons about any of the parties, but you mustn't put anything in favour of Socialism, because the police won't stand it. . . .'²⁰

オーウェル自身は、そのルポルタージュ作品でポーズという歩道に絵を描く男を登場させている。彼はただの労働者ではなく、ロンドン訛りを使うがその話しぶりは明晰で表現力があつた。書物から得たと思いき知識があり、文法の間違いを簡単に正すことができた。彼が自身の仕事をひとに語って聞かせる描写を置くことで、オーウェルは彼がいわゆる日雇いの労働者

と異なっている点を伝えようとしている。彼が自信をもって歩道に描かれる絵を制作していることは、決して安くない画家が使うのと同等の絵の具を使うという言葉に示される。その絵の対象となるのは、クリケットの試合の結果やその他一般受けするものである。しかし彼は、抜け目なく政治の世界を風刺する。新聞に掲載される政治家の愚かな姿をノートに書き写している。彼の描く舗道の絵はそれがもたっている。また彼は、自分の身が危険に晒されないように気を配る。だから、決して警官の目に留まるような社会主義の臭いのする絵を描くことはない。

オーウェルはこの歩道絵描きのポーゾーという男を創造することにより、英国が社会主義思想に警戒を強めている時代背景を読者に強く印象付けようとしている。

テイラーの伝記の一節は、作品理解の一つの手掛かりを与えてくれる。それはまた、貧しい者たちが如何にして生活の糧を得ているかの説明でもある。彼の説明の下敷になっているのはオーウェルの日記である。手持ちの金が残り少なくなったオーウェルとジンジャーという名の若いユダヤ人とアイルランド人の女は、トラックの運転手に連れられるままにホップ摘み人夫となり「どや (spike)」暮らしを始める。

一方、作品の中には、舗道に絵を描いて生計を立てるポーゾーという人物が登場する。彼は、パディーの友人である。彼は風刺漫画を描いている。クリケットの試合などの材料で描くこともあるが、多くは政治家を風刺したものである。テイラーの伝記の中には、日記への言及が見られる。その一方で彼は、*Down and Out* がルポルタージュ作品であることに注目する。彼が伝記の中でアイルランド人ジンジャーに言及することで、私たちはオーウェルの作品 *Down and Out* のアイルランド人のパディを思い起こす。²¹

第三章 伝記の描写から読み取れるもの

先の章で、オーウェルの生誕100周年を記念して出版された二つの伝記に言及した。しかしながら、それらの伝記の下敷きになっている他

の伝記や批評書を無視することはできないであろう。そこで、彼らが大いに参考にした先達の伝記について少し言及しておきたい。主として避けて通れない作家は、クリックとシェルデンであろう。前者はオーウェルの夫人ソニアのお墨付きを受けて1980年に初めて正式な伝記を執筆したし、後者はほぼその10年後に新たな未公開資料をもとに執筆されたもので「正式な (authorized)」という文字を冠した。

しかしながらそのはるか以前に、オーウェルの友人の一人 クリストファー・ホリスは *A Study of George Orwell: The Man and His Works* (1956) を発表している。作家の死後6年にして発表されたこの書物は、オーウェルの伝記のさきがけであると考えてよいであろう。ホリスはこの書物の中で、作家の作品を主たる章建てのタイトルとしそれらの作品を軸に作家の人生を語っている。例えば、私がこの小論で中心にしている *Down and Out* の章においては、次のような描写をおいている。

A more important question is the parallel question to that of why he changed his name. Why was he down and out at all? He gives no explanation in the book, and every indication is that his condition was quite unnecessary in every normal economic sense. He merely tells us the unvarnished fact that his money was running out and that therefore he had to start looking for a job. 'Hitherto I had not thought about the future, but now I realized that I must do something at once. I decided to start looking for a job'. He writes. Such zany fecklessness was quite contrary to his nature, nor, even supposing that all the luck was against him, was he without friends to whom he could turn. Mr. Fyvell in his article in the *World Review* has told us how Orwell told him that he 'had little money, few social connections and no special trade; it was a time of unemployment; a respectable job would have been difficult'.²²

ホリスは、エリック・ブレアがその名をジョージ・オーウェルと変えたことへの疑問を提示する。エリックの説明では、金がなくなり仕事を探さざるを得なくなったということである。しかし、金がないからという態度はのちのオーウェルの強さが見られないと考える。そして、オーウェルの友人の一人フィベルの説明する当時のオーウェルの疲弊した状態の描写を逆手にとり、なぜフィベルのような友人に助けを請わなかったのか、と疑問を呈する。ホリスは、オーウェルが底辺の労働者の中に身を置いたのは、彼なりのはっきりした意図があったと暗に認めている。ホリスは、物質的のみならず精神的にも、当時のオーウェルの限界を指摘しているように見える。

ここで、伝記の定義について、ハーミオニー・リーの言葉を引いておきたい。19世紀まで伝記の対象となる人物については良い面だけを描いてきたが、20世紀の伝記作者は必ずしも良い面だけを描くということがなくなってきた。むしろ、否定的な側面をも白日のもとに晒すという態度をとるようになった。

... The biographer could be the equal, not the respectful or awe-struck disciple, of the subject. Biographers were self-conscious; biography might even be seen as a form of autobiography. Above all, biography aimed to uncover the inner self behind the public figure, with the help of the new tool of psychoanalysis.²³

フロイドが無意識の存在を発見した20世紀になると、従来のように対象となる人物の肯定的な面ばかりを描写することは伝記作家としては公平な態度ではないという風潮が起こった。伝記作家は、伝記を描くとき心理分析の手法を用いて対象となる人物の否定的な側面にも光を当てるようになった。では、オーウェルの否定的な側面とは如何なるものであろうか。

ボーカーは、イートン卒業後に警察官になることを決意した理由を、父親の援助を受けたくないという意識であったと説明する。また、そ

の5年後、かなり唐突に職を辞すことを宣言する。それは、ビルマでその作家が目にしたものや雑誌によって得た社会主義思想を多くの人々と共有することを目的とするからだと言う。

例えばボーカーは、ビルマから帰国した当時のオーウェルと3人の女性との関りを次のように描く。その中の一人ルス・ピター (Ruth Pitter) は、オーウェルはあまりにも幼いと映る。それは、やや滑稽と映る彼の行動が大きく影響している。エレノア・ジャック (Eleanor Jaque) は、結婚など眼中にない独立心旺盛な女性であった。その一端を表わすエピソードは、オーウェルは彼女の前では遠慮なくスコットランド人への偏見を口にすることができた。そして、三人目のブレンダ・ソケルド (Brenda Salkeld) は、上記の二人とは異なっていた。ボーカーは次のように描く。

Branda was a different matter. She was tall and athletic, three years older than him, and, like Richard Blair, had been born in a Dorset vicarage. He fell very much under the spell of this clergyman's daughter – the enchantment of unattainability – and would remain so for many years to come. She found him deeply interesting and admired his absolute commitment to literature, but thought that he lacked feeling, especially for women, detecting in him, as others did, a cruel, even sadistic, streak. . . .

... Brenda noticed how he enjoyed trying to shock her with tales of his exploits in Burma and to offend her sense of delicacy with risqué stories and his collection of rude seaside postcards. On one occasion he tramped all the way from Southwold to her home in Bedford, turning up on the doorstep and announcing that he had just come from the casual ward of the local workhouse. Her mother and sisters were predictably horrified and he was immediately packed upstairs for a bath. ("We were all saying, "I hope he doesn't use my loofah.") Brenda was not a little scornful of

him acting the vagrant. He knew he could always go home, so could never experience what a real tramp felt, she told him.²⁴

このブレンダ・ソケルドについての逸話は、若きエリック青年がビルマでの悲惨な体験がある程度オブラートに包んで、赤裸々な描写は避けて行っていることを示す。また、彼女はオーウェルが最後のよりどころとして実家の両親の家を考えていたことを表明する。

さらに、オーウェルの内面を深く切り込んでいる部分を次に取り上げるなら、以下の箇所がそれに該当するであろう。

Clandestine sex, such as he enjoyed in Burma and Paris, meant having to play a secretive role, to conceal the beastly Hyde inside the caring Jekyll. It was a dual role from which he did not recoil, and in a way it matched the double life he had already chosen to live between the subterranean world of outcasts and the polite world of home and respectability. ‘Oh, what tangled webs we weave . . .’ he wrote to Brenda, fearing their relationship would become known to others in Southwold, especially Eleanor. Some who came to recognize this duality in him saw it as an internal conflict, a continuous struggle to suppress the dark side of himself—a secular Pilgrim beset by fleshly temptations. But it was more than sexually deviant thoughts with which he was wrestling; it was, on his own admission, the fearful memories of the diabolical hatred of which he was capable.²⁵

そしてここでは、オーウェルの二重人格的な点が言及される。それは、オーウェルが彼の内面に存在する軋轢、すなわち自己の闇の部分を抑えようとする絶え間のない戦いである。

一方テイラーは、ボーカーほどオーウェルの内的な特質に過度にこだわることはない。彼はせいぜいオーウェルの奇異なふるまいに言及するにとどまる。

No doubt this picture of a minor black sheep silently outraging his conventional family has become calcified by time. Still, there was something odd about Orwell in the context of 1930s Southwold: introvert, detached, literally vagrant.²⁶

ホームレスに身をやつして貧しい者たちの生活を観察するが、一方でオーウェル自身はホームレスではないと、テイラーは指摘する。

この二人の批評家はともに、オーウェルの現実の生活と彼の行動とのギャップを指摘している。ただし、テイラーの独自性は以下の引用に表れている。

. . . At the same time there is a sense of something more fundamental moving beneath, a compulsion to immerse himself in an activity from which his more sensitive side revolted. David Astor, with whom Orwell later discussed his tramping adventures, believed that on one level he undertook them simply to try to overcome his ingrained fastidiousness, his fear of dirt and sweat, to see how far he could push himself. A piece like ‘The Spike’ offers a portrait of a man in whom limitless moral sympathy and outright physical disgust are uneasily contending. It is this tension that gives Orwell’s writing about down-and-outs and the squalor of the sevenpenny doss houses its sheen.²⁷

デイビッド・アスターは考える。オーウェルは、自身の心の深みに存在する難しい性質をなんとか克服しようとしている。例えば、*The Spike* (1931) という小編では、オーウェルは自分自身を投影させたような人物を配している。主人公は限りなく道徳上の同情を示すが、一方で彼は、彼の気質から生じる嫌悪感から、不安げに争いを繰り広げる。

ボーカーもオーウェルのいわゆる「二重性」について指摘しているが、それは礼儀を重んじる風潮を背負う作家と、周りの闇の世界を描く

作家としての二重性を意味している。それに対して、テイラーは、作家が幼いころに植えつけられた労働者階級の「汚れやにおい」を克服する手段としてホームレスの世界に飛び込み彼らの悲惨な生活を観察していると解釈する。

作品 *Down and Out* を著わす時期に、オーウェルはブレンダ・ソケルドという女性に恋したという事実をこれら二つの伝記は教えてくれる。一方、最初に言及したホリスの伝記からは、この時期の社会の情勢と作家オーウェルの置かれた決して恵まれたといえない状況とが伝わってくる。しかしながら、ポーカークとテイラーの伝記からは、より深いまたは外見からは見えない作家の闇の部分の存在をも読者に知らせてくれる。前者はホームレスの世界とオーウェルの故郷の生活を対比的にとらえているのに対して、後者は病的とは異なる意味で、作家の心の中には浮浪者に対する嫌悪がトラウマのように存在したと指摘する。オーウェルは、警察官としてビルマに滞在した5年間で目の当たりにした貧しくて虐げられている人々に近づく努力をしているのである。

結論

この小論において私は、伝記と作品との関係は作品理解という観点からは切っても切れない関係であると述べてきた。伝記とはある作家の全人生を描く一つの物語である。それを概観すると、我々は作家の人生を駆け足で知ることができる。一方、その全体は個々の作品解説の集合体ともいえる。その点からは、私が膨大な作家の遺産の中から一つの作品を選択したことにある意味付けをすることができるであろう。作家の人生全体を相手に格闘することは焦点が拡散し得策ではない。

論をすすめるに当たり、私はジョージ・オーウェルの作家人生の分岐点となる作品 *Down and Out* を取り上げた。すでに詳述したように、本名をエリック・ブレアという彼がこの作品からジョージ・オーウェルという名を使い始めたのである。当時の社会情勢から、また編集者の置かれた状況から、エリックは筆名を使用せざる

を得なくなった。しかしこれ以降、彼はこの名によって、作家としての存在を広く知られるようになっていく。

学校を卒業し父の「呪縛」から逃れるために、すなわち金銭的な独立を図るために、エリック青年は植民地警察官の道を歩み始める。しかしながら、これは皮肉にも父と同じように、大英帝国の支配下にある植民地で国家の下僕として働くという選択でもあった。彼がこの選択をした理由についての説得力のある説明をしている伝記は皆無に等しい。当時好意を寄せていた女性に失恋をしたというたぐいの理由づけに留まっている。一方では、この選択がなければ、社会に鋭い批判の目を向けるジョージ・オーウェルは生まれなかったであろう。元々、作家として身を立てたいと思っていた若者であったので、多かれ少なかれ物書きとして身を立てることは現実のものとなっていたであろうが、社会批評家としての鋭い視点はビルマでの警察官としての経験がなければ養われることはなかったであろう。

Down and Out を著わすに当たって、オーウェルはパリとロンドンにて社会の最下層で生きる人々の観察を行っている。パリでの観察の成果は、作品中のパリの高級ホテルで働く下働きの労働者、彼はそれを仏語の単語 *plonguer* という語で表現している。これを、周りのものから無理難題を押し付けながらもそれを卒なくこなすホテル従業員という意味に解釈すれば、この言葉の持つ意味に重みが増すであろう。一方ロンドンでは、最下層の労働者たちの様子を観察してその劣悪な状況を描いている。

オーウェル生誕百年に伝記を発表した二人の批評家ポーカークとテイラーも、オーウェルの現実の状況と彼の奇異な行動との隔たりを「大きな溝 (gap)」ととらえている。ジョージ・オーウェルという作家は複雑な人物であるということは、多くの伝記が指摘している通りである。ここで、伝記作家の言及するオーウェル像をまとめると次のようになるであろう。

複雑な人物は、ビルマでの警察官という無視すべからぬ体験をへて大きな変貌を遂げる。幼少期の厳しい寄宿学校での生活が最初の彼の複

雑な性格形成の一端を担ったことは確かであろうが、警察官として公僕として国の体制を垣間見たことは何物にも変え難い体験であったのである。すでに、ビルマに滞在中に政治的な批評を実践し始めていたエリック・ブレアが病を理由に一時帰国している間に大きな変貌を遂げてしまった。これは、エリック自身の意識も及ばないくらい急速なものであったに違いない。そして、彼は貧しい労働者の実態を観察した結果、ジョージ・オーウェルという筆名を用いて、その後の彼の歩むべき道を決かなものにしたのである。

註釈

- 1 Gordon Bowker, 'Orwell and the biographers' in Rodden, John. ed. *THE CAMBRIDGE COMPANION TO GEORGE ORWELL* (Cambridge: CUP., 2007), 12. 以後 'Ob' と略し、頁番号のみを記す。
- 2 'Ob', 12.
- 3 Gordon Bowker, *GEORGE ORWELL*, (London: Abacus, 2004), 1. 以後 *GO* と略し、頁番号のみを記す。
- 4 *GO*, 3-8.
- 5 'Ob', 12.
- 6 ボーカーは 'Ob', 146 の中で、ホリスの伝記が出版されるまでの、ソニアとオーウェルの伝記作家たちとの確執に言及している。彼女は許可なくオーウェル資料を用いるものを強く非難した。さらに、ウッドコック (George Woodcock) の手になる *The Cristal Spirit* のようにソニアの許可を受けた伝記の出版も非常に慎重に行われたと述べている。
- 7 *GO*, iii-xvi.
- 8 D. J. Taylor, *ORWELL THE LIFE*, (London: Vintage, 2004), 77. 以後 *OTL* と略し、頁番号のみを記す。
- 9 *OTL*, 1-9.
- 10 'Ob', 16-7
- 11 *OTL*, 83
- 12 *GO*, 105.
- 13 George Orwell, *Down and Out in Paris and London* with an Introduction Dervla Murphy and A Note on the Text by Peter Davison (London: Penguin Books, 2001), 31. 以後 *DOPL* と略し、頁番号のみを引用の末尾に記す。
- 14 *DOPL*, 37.
- 15 *DOPL*, 58.
- 16 *DOPL*, 60.
- 17 *DOPL*, 62.
- 18 *GO*, 114.
- 19 *OTL*, 116.
- 20 *DOPL*, 172-173.
- 21 オーウェルは "Hop-Picking Diary" (*The Orwell Diaries* 1-22) の中で、ホップ摘みに従事する労働者たちの行動を観察し記録している。例えば、「私」はともに行動するジンジャーとアイルランド人の女が盗みを働くときその片棒を担がされる。一方で、「私」の思わぬ失敗をユーモラスに描くことを忘れない。わが身を労働者にやつしコックニー英語でそれらしくふるまっている「私」がある瞬間ふと、そのことを忘れいつもの話し方に戻ってしまっていることに気がつく。したたかに生きる労働者のジンジャーやアイルランド人の女と出会ったオーウェルは、*Down and Out* の中でパディーやホーゾーを創り上げている。
- 22 Christopher Hollis, *A Study of George Orwell: The Man and His Works*. (London: Hollis & Carter, 1956), 46.
- 23 Hermione Lee, *BIOGRAPHY A Very Short Introduction* (New York: OUP, 2009), 72.
- 24 *GO*, 124-125.
- 25 *GO*, 125-126.
- 26 *OTL*, 110.
- 27 *OTL*, 110.

参考文献

- Bowker, Gordon. *GEORGE ORWELL*. London: Abacus, 2004.
- Crick, Bernard. *GEORGE ORWELL A LIFE*. London: Secker & Warburg, 1980.
- Rodden, John. *THE CAMBRIDGE COMPANION TO GEORGE ORWELL*. Cambridge: CUP., 2007.

- Gross, Miriam. *The World of George Orwell* London: Weidenfeld and Nicolson, 1971.
- Hollis, Christopher. *A Study of George Orwell* London: Hollis & Carter, 1956.
- Lee, Hermione. *BIOGRAPHY A Very Short Introduction* New York: OUP, 2009.
- Shelden, Michael. *ORWELL The Authorised Biography* London: Minerva, 1992.
- Stansky, Peter & Abrahams, William. *The Unknown Orwell* London: Constable, 1994.
- Stansky, Peter & Abrahams, William. *Orwell: The Transformation* London: Constable, 1994.
- Taylor, D. J. *ORWELL THE LIFE* London: Vintage, 2004.
- Woodcock, George. *The Cristal Spirit: A Study of George Orwell* London: Jonathan Cape, 1967.

使用テキスト

- Orwell, George. *Down and Out in Paris and London* with an Introduction by Dervla Murphy and A Note on the Text by Peter Davison London: Penguin Books, 2001.
- Orwell, George. *The Orwell Diaries* edited by Peter Davison London: Penguin Books, 2010.

Abstract

Orwell's Works of Art and Two Centennial Biographies: Looking through *Down and Out in Paris and London*

George Orwell(1903-1950) opposes the portrayal of his life history. He leaves his will which prohibits biographers from writing about his life after his death. He also mentions how literary biographers should portray their subjects. He insists that biographers should focus on a writer's family tree. It might be noted how intricate and inexplicable Orwell's personality is.

He serves as a police officer in British colonial Burma. All of a sudden his life as a professional writer is launched after he stays in Burma for five years. *Down and Out in Paris and London* (1933) is a landmark of his writer's career. This work of reportage is published with the signature "George Orwell" instead of his real name, Eric Blair.

A great many biographies on George Orwell exist at present. The first "authorized" biography is written by Bernard Crick in 1980. However, in 2003, the centennial year of the writer, two crucial biographies come to us. Gordon Bowker, a critic and biographer, produces his *GEORGE ORWELL* with his unique inspection of secret material between the writer and a spy organization, the KGB. D. J. Taylor, a novelist and researcher of manners and customs in 19th and 20th century Britain, delivers his *ORWELL THE LIFE* with a fascinating portrayal of the writer from the professional writer's point of view.

The goal of this paper is to focus on how beneficial a comprehensive reading of biographies is in understanding a writer and his works. To achieve this goal the two new books mentioned above of George Orwell's life and his work of art, *Down and Out in Paris and London* are mainly utilized. The reportage is his observation of how lower-class workers in Europe are exploited in the years prior to World War II.

A comprehensive reading of biographies brings us to a finding of how a writer's life and works of art are correlated. Some show us how meticulously the writer takes notes and leaves memos. Others inform us of how deep the unconscious realm of the writer is. Through a careful study of the writer's works and all biographical material available, it is possible to form a deeper view of the whole body of the author's works and how they reflect the critical phases of his life.

Key words: British colonial Burma, biographies, the centennial year, a finding